

閉会のあいさつ



財団法人力学研究所所長
九州大学名誉教授

安藤 延 男

安藤でございます。本日は第21回のシンポジウム「21世紀の労働と人間」一働くことの意味—ということで、特に九州新幹線の部分開通を中心に据え、地域へのインパクトと人の動きといった諸問題につきまして、有意義で素晴らしいご議論を頂き、本当に厚く御礼申し上げます。

3月13日の九州新幹線部分開通まで、もう1ヶ月を切っておりますが、間近に迫ったこの出来事が、私どもの住んでおります九州というブロックの今後、或いは我々の生活にどのような影響を及ぼすかを考え、「期待」と「不安」の入り交じったような気持ちで拝聴しました。

今日、基調講演では、九州のポテンシャルといった、非常に元気の出るお話をいただき、大変嬉しく拝聴致しました。新たな戦略的な視点さえも示唆されているようでございました。

パネル・ディスカッションの討議におきましては、(株)西日本新聞社の玉川専務取締役の、絶妙なコーディネーターシップのもと、知的好奇心をそそられるような、討議をいただきました。2時間が非常に短く感じられた次第でございます。「鹿児島の人々の立場」、それから「博多の人々の立場」、或いは「九州ブロック人としての立場」、また杉万先生のおっしゃる「漂住者」的な体験をするような思いでございました。

そういうわけで、私ども財団法人力学研究所は、これから1年間、研究と地域での実践に取り組んで参ります。

来年のことを言ってしまうかと思いますが、新幹線が開通しまして、丁度1年が過ぎるころでございます。今日出ております「期待」や「不安」、それから「仮説」などが、どのように展開していくかというのは、これはとても楽しみでございますが、楽しんでいただけでは駄目で、我々も当事者の一人として努力をしなければならないと思っております。

なお、今日初めての試みでございましたが、研究所の事業や研究活動について、副所長の杉万が報告を致しました。その中で、造船所、学校、炭鉱、或いは病院などのリーダーシップと安全の問題などもございます。これらの問題について、我々の研究所が久しく取り組んで参ったことは、既に申しあげたとおりです。今年新たに、下半期になりまして、内閣府の原子力安全委員会から私どもの研究所へ業務委託が参りました。業務委託のテーマは、「原子力安全文化の尺度の検討に向けた基礎的調査」ということでございます。「安全文化」という言葉は、あまり聞きなれない言葉かもしれませんが、組織とか、国家というところには、安全に関する文化が、顕在的でない場合もございますし、暗黙の規範意識といった形で存在しています。それを、「もう少しはっきりと取り出して見ようではないか」、というのが、内閣府の原子力安全委員会の課題意識

であろうと思います。その研究の委託先が私どもの集団力学研究所になったということは、1つのニュースになるんじゃないかと、そういうふうに思っております。今年度は事前準備ということで、本格的な作業は、新年度以降を待たなくてはなりません。私たちの集団力学研究所の最も新しい近況としてご報告いたします。

来年度も是非、第22回目シンポジウムを実施いたしたいと思っております。

皆様には、大変長時間ご聴聞を頂きまして、ありがとうございました。

これをもって、今日のシンポジウムを終わらせて頂きます。シンポジストの皆様、参加者の皆様、本当にありがとうございました。